

万吉だより

MA GECHI NEWS

第6号 平成19(2007)年3月

Oriental Bell Museum

館長 池上 悟

立正大学熊谷校地に開設された立正大学博物館は、主要な収蔵品によってOriental Bell Museumとも称している。前館長の坂誥秀一博士の命名になるところであり、真鍋孝志氏により平成11年に寄贈された、国内外の200点を越える鐘のコレクションに由来するものである。

寄贈された梵鐘中の、稀少価値を有する大和国橿原出土の平安時代の古鐘は、龍頭を欠損し鐘身は変形した状態であったが、このたび真鍋孝志氏の篤志により常陸真壁の鋳物師によって復元品が製作され、立正大学博物館に寄贈された。

このお陰をもって、はじめて鐘の音を聞くことが可能となった。仏教における鐘の功德は「一打鐘声、当願衆生、脱三界苦、頓証菩提」、「若聴鐘声、除五百却、死生重罪、皆悉消滅」と阿含経に記されており、鐘の音を聞くことにより罪はあらわれ、煩惱を除き、清浄土に往生できるとされている。

わが国における梵鐘研究は、坪井良平氏により大成され、古代にわが国に将来された梵鐘は鎌倉時代に定型化して近世に至る動向が明確にされている。真鍋孝志氏は坪井良平氏の教えをうけ梵鐘の蒐集・研究を進められてきている。

戦国時代、寺院に懸垂された多くの梵鐘は、寺院から運び出されて陣鐘として用いられ、本来の献納先から転出した例も多い。また先般の大戦時には、江戸時代以降の多くの梵鐘が兵器製造の地金として供出され、実に多くの梵鐘が消失した。

現存する古鐘は、これら数次の災厄を免れてきた歴史の証人として、1口といえども軽視することはいかない貴重な歴史的遺産である。

しかるに近年、単に金属の地金としての用で関東地方の多くの半鐘が盗難の被害にあっている。被害にあった40口を上回る資料中には、恐らく江戸時代の製品を含まれているものと思われる。一時的煩惱がもたらした災厄として、実に嘆かわしく取り返しがつかない事態である。

寺院に献納された鐘は、半鐘を含め個別の由来を有しており、銘文に明記される場所である。その延長として蒐集品として博物館に所蔵されており、その背景に留意して活用すべき貴重な資料となっている。

大学博物館の使命に思う

吉川 國男



立正大学熊谷キャンパスは、荒川の中流域の右岸側・江南台地上にあります。キャンパスは、コナラ・アカマツを優占種にクヌギ・エゴノキ・アカシデ・シラカシなどが混る平地林を所々に残して校舎・運動場・学生寮などが配置されており、羨ましいほどの学園環境といえましょう。当大学博物館は、キャンパスのほぼ中央にあり、荒川の支流である和田吉野川の源流が流れる林内に、独立建物として鎮まっている格好です。入口に梵鐘が置かれており、この博物館の性格を象徴してくれるかのようです。

博物館は、学問的なコレクション（資料群）を保有することを前提に成り立つ教育機関です。その点でも立正大学博物館は、その道の研究者から垂涎のコレクションを所蔵し、それらは調査研究の過程で収集されたところに大きな魅力と特色があります。博物館学的に言えば、しっかりしたデータを具備するコレクションなのです。しかもそれらが、歴史考古学の泰斗の先生方～石田茂作、久保常晴、坂詰秀一～らによって調査収集されてきた資料であるからです。

まず海外の資料では、釈迦が在住したティラウラコット遺跡（カピラ城）の出土品は、坂詰先生や高村弘毅学長らによって発掘調査されたもので、世界的にも注目されるものです。久保先生のサハリンでの収集品は極東文化の研究上貴重なものです。量的に多いのは坂詰先生が長年調査研究された須恵器や武蔵国分寺関係の瓦をはじめその焼成窯の膨大な資料であり、これらは古墳時代から平安時代にかけての窯業生産や陶芸史の前史を物語る基本的な資料群として、また学史的にも高く評価されているものです。

立正大学OBの吉田格先生の寄贈品——縄文早期の花輪台式土器（茨城）、後期の称名寺貝塚（神

奈川）の出土品や晩期の石神貝塚（埼玉）の出土品も該期の標式土器であるとともに、なかでも称名寺貝塚の土器やイルカなどの遺存体、骨角器などは縄文後期の東京湾を主漁場とする漁労文化を研究する一級の資料です。

美術史研究家の真鍋孝志氏の寄贈品は、内外の梵鐘や銅鼓に及び当館が誇る仏教考古学のコレクションです。そのほか、江戸時代の蒐集家・伊藤圭介の石器コレクション、若き坂詰先生による旧石器研究の草創期における発掘品なども話題性のつよいコレクションです。上野恵司先生がこれらの考古資料を限られた展示空間のなかで、文字どおり心血を注いで展観されたディスプレイ手法は、収蔵展示の極致を教えられる思いです。

このように実に質の高い、秀逸な一級のコレクション群を保有する博物館が、地域にも中央にもまだ広く知られていないのは、惜しみても余りあります。

申すまでもなく、大学博物館の使命は研究と高等教育にあります。その使命達成のために二つのことを望みたいものです。一つは、これらの素晴らしい資料を活用して講座・講演会を少なくとも年4・5回は開催する。学生はもちろんのこと、地域や学界にも広く呼びかけ、講師は学内に限らずその分野の専門家に依頼する。開催にあたっては、関係学会、研究会や近隣にある県の文化財施設や市町村教育委員会と連携する。開催後には、講義・講演録を印刷頒布する。もう一つは、資料収集活動を継続することです。それも以前坂詰先生が行ってきたような、研究しながら行うという姿勢が大事です。そうすれば、自ずと質の高い資料が集まってくることでしょう。

熊谷地方の周辺は、古代寺院が点在し、館・城や板碑の全国的にも集中地です。いわば古代から中世初期にかけて、時代のトレンドを先取りした地域であることを、私は最近とみに感じています。当博物館は、まことに地の利を得た所に立地していることも、今後への期待をふくらませてくれる所以です。

（文学部講師、博物館学担当）

特別展 江戸狩野とその世界

—作品と墓所—

本間 岳人



平成18年10月、立正大学博物館において特別展「江戸狩野とその世界」が開催された。この展覧会は、平成15年に日蓮宗大本山池上本門寺（東京都大田区）において実施された奥絵師江戸狩野

家墓所の発掘調査の成果を公開し、墓所出土品や絵画作品を通して江戸狩野の世界を紹介することを意図したものであった。また、狩野家のみでなく本門寺における近年の発掘調査成果も併せて公開された。

発掘調査から研究報告書の作成に携わり、本展覧会にも協力をさせて頂いた一人として、この展覧会について簡単に紹介することにしたい。

池上本門寺では、立教開宗750年慶讃事業の一環として行われた平成14年の五重塔周辺整備に伴う大名家墓所の発掘調査に始まり、平成15年の江戸狩野家墓所、そして平成17年からは本門寺の山内寺院である永寿院において芳心院殿（徳川家康孫で鳥取藩池田光仲正室）墓所の調査が、坂詰秀一博士（当館前館長・立正大学名誉教授）を団長として佛教石造文化財研究所（松原典明代表）および立正大学考古学研究室の協力を得て組織された調査団によって実施されている。

これまでに上梓された『池上本門寺 近世大名家墓所の調査』（平成14年）、『池上本門寺 奥絵師江戸狩野家墓所の調査』（平成16年）という二冊の調査研究報告のほか、平成17年6月に池上本門寺霊寶殿において開催された「狩野常信・周信・養信の遺品」展の成果を継続して、この度の立正大学博物館の特別展へと至ったわけである。

なおタイトルにある「江戸狩野」とは、室町時代から明治初頭までの400年の歴史を誇る狩野派のなかでも、江戸時代に幕府御用絵師として活躍した狩野派（家）を意味する。江戸狩野の始まりは著名な狩野探幽で、いわゆる瀟洒淡麗の画風を

得意とした。探幽三兄弟を祖とする中橋家（安信）・鍛冶橋家（探幽）・木挽町家（尚信）に、浜町家を加えた4家は、奥絵師として近世画壇の筆頭の立場にあり、その身分は、將軍御目見得以上の旗本格式で帯刀を許され200石程の知行を得る高い格式であった。狩野家の多くは日蓮宗の信者で、奥絵師4家は池上本門寺を菩提寺としていた。

展示は、狩野家墓所出土品と絵画作品、大名家墓所出土品によって構成された。狩野家墓所出土品では、発掘調査によって検出された木挽町家2代常信・3代周信の副葬品が展覧された。煙管箱や香道具など嗜好を示す品や、竹光の刀装具や携帯用の筆箱、眼鏡などは奥絵師としての身分や仕事振りを窺うことができる品であり、常信墓出土の経巻軸先は篤い法華信仰を物語るものであった。また、9代養信の頭骨から復元した複顔像は、そのリアルさに多くの来館者が注目していた。発掘調査では特に墓所の構造に注視したが、実測図や写真とともに展示された構造模型によって、奥絵師の墓構造が視覚的にも理解されたものと思う。

絵画作品は、常信筆「釈迦三尊図」・周信筆「雪景山水図」・伝養信筆「巖松図」のほか、粉本類（篠原探谷資料）が出品され、絵師としての江戸狩野の技法が示された。

以上に加え、池上本門寺大名家墓所の出土品や徳川將軍家墓所出土の礫石経（当館蔵）なども展示され、近世の葬送に関わるバラエティ豊かな展示となった。

また関連事業として、10月21日に講演会が行われ、坂輪宣教先生（仏教学部教授）による記念講演、安藤昌就氏（池上本門寺霊寶殿）による「池上本門寺と江戸狩野家」と、筆者「江戸狩野家墓所の調査」が発表され、様々な視覚から展示を学ぶ一助となったと思う。

この度の「江戸狩野とその世界」展は立正大学同窓生が携わってきた調査研究の成果を公表する良い機会となったのではないだろうか。今後も、同窓生が協力して企画展などに参画し、同窓生の調査研究活動を学生や一般に広く知らせる場として立正大学博物館が活用されればと思う。

（池上本門寺霊寶殿・品川歴史館 学芸員）

展示資料の背景 (6)

野原古墳群出土遺物

池上 悟

立正大学博物館では、熊谷校地の近隣に位置する野原古墳群出土の資料を所蔵している。

熊谷校地開学に先立つ昭和39年に、立正大学考古学研究室が8基の円墳を発掘調査したときの出土遺物である。直刀1口、鉄鎌3点、刀子4点、須恵器フラスコ形細頸瓶2個体などであり、貴重な古墳時代資料となっている。

野原古墳群は、立正大学熊谷校地が位置する江南台地の南側の、東流する和田川に面した標高40~50mの台地南縁辺部に展開した、かつては30基ほどを数えた群集墳である。

古墳群の盟主墳は全長約40mの前方後円墳の野原古墳であり、「踊る埴輪」の出土で著名である。後円部と前方部に凝灰岩の切石を用いた2基の横穴式石室を構築しており、後円部石室は奥壁に一枚石を用いた玄室長310cmの片袖式石室、前方部石室は片袖式の玄室側壁が曲線を呈して外側に張り出す胴張り石室である。胴張り様相の認められない後円部石室が先行して構築された、6世紀後半代の所産と理解される。

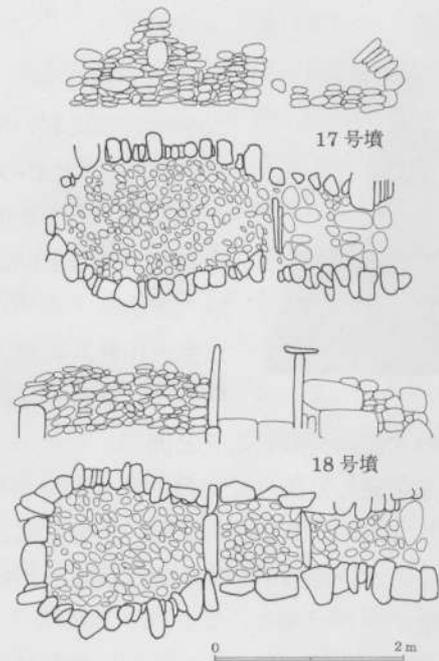
昭和39年に発掘調査された円墳はすべて盗掘されており、確認された5基の横穴式石室は全て天井石は欠如していた。

5基の横穴式石室は、片袖式石室と胴張り石室が知られ、使用石材では凝灰岩と川原石の違いが認められる。

7号墳石室が凝灰岩使用の全長5mの片袖式石室、6号墳石室が凝灰岩使用の全長3.5mの胴張り石室であり、この2古墳からは埴輪の出土が確認されている。

18号墳は奥壁および羨道部に凝灰岩を使用し、玄室の胴張り部分に川原石を用いた全長4.5mの胴張り石室、16・17号の2基の石室は川原石のみを使用した胴張り石室である。

これらの古墳のうち、最も多くの遺物が出土したのは17号墳であり、直刀、鉄鎌、刀子、金環、



第1図 野原古墳群 石室実測図

須恵器、土師器が出土している。

須恵器2個体は17号墳から出土したフラスコ形細頸瓶である。1は胴部の過半を欠損する資料であり、器高19.2cm、胴部最大幅13cmに復元される器厚の厚い重量ある個体である。

2は胴部の一部を欠損しており、器高21.1cm、胴部最大幅14.5cmを測る外面全体に自然釉の顕著な個体である。7世紀前半代の資料と考えられる資料であり、1が古相を呈している。

鉄鎌は3点の形状を確認できる。いずれも腸挟有茎平根式であり、棘篋被のもので全長87~107mmを測る。

鎌身は3・4が三角形を呈するのに対し、5はやや肩部の張る形状であり、篋被部がやや長い。

これらは7世紀中頃の年代的特徴を示しており、5がやや古相を呈している。

即ちこれらの資料は、7世紀前半から中葉にかけての所産と理解されるところである。

発掘調査された5基の石室を、盟主墳である前方後円墳である野原古墳の石室との比較で考えれば、7号墳石室が野原古墳後円部石室、6号古墳石室が野原古墳前方部石室に並行する6世紀後半

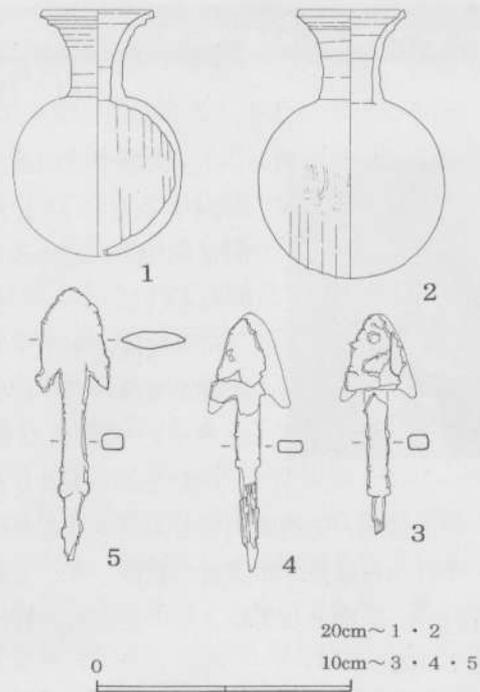
代の群集墳の形成初期に築造されたものと考えられる。

次いで7世紀初頭頃に、凝灰岩と川原石を併用した胴張り石室である18号古墳石室、7世紀前半から中葉にかけて16・17号墳石室が構築されたものと考えられる。

野原古墳群は、前方後円墳の築造を契機として群形成を開始した典型的な群集墳として理解されるものであり、前方後円墳とほぼ同時に円墳も築造された点が調査された類似構造の石室から想定できる。

複数の古墳造営主体が墳形に格差を内包して、継続して古墳築造を継続した状況を確認できるところである。

(博物館館長)



第2図 野原古墳群 出土遺物

伝樺原市出土鐘（復元品）

内田 勇樹

平成18年11月17日、撫石庵コレクションの寄贈者の眞鍋孝志氏（日本古鐘研究会会長）より、伝樺原市出土鐘の復元品（写真1）を新たに寄贈して頂きました。

伝樺原市出土鐘は、遺存高46.1cm、口径30.2cmを測る平安時代前期頃に製作されたと推定される青銅製の梵鐘です（写真2）。

もともと藤沢一夫氏（平成15年逝去。四天王寺国際仏教大学名誉教授）が古物商から入手されたもので、その後眞鍋氏が譲り受け立正大学博物館に寄贈して頂いたものです。生前、藤沢氏が「大和で出土したものは大和で展示したい」と話されていたことから藤沢氏の3回忌に間に合うように約1年がかりで復元鐘が完成しました。一つは元興寺（奈良県）に、一つは大鐘寺古鐘博物館（中華人民共和国）、一つは千光寺（広島県）、そして立正大学博物館に寄贈されました。

もとの鐘自体は工事中に発見されたこともあり、鐘身の半分がつぶれ残り半身もその影響を受けて若干歪んで、龍頭も残っていない状態です。そこで、『撫石庵コレクション考古資料図録（Ⅱ）』（立正大学学園平成13（2001）年2月）に掲載さ

れている復元実測図を元に、茨城県の鋳物師小田部氏に依頼し復元されました。立正大学博物館に寄贈して頂いた復元鐘は、鋳出した状態のままです。衝き座は実際の伝樺原出土梵鐘からおこしたものです。鐘を打つと約1分弱、澄みきった心地よい音が鳴り響きます。ぜひ博物館に足を運んでいただき復元鐘の音をお聞き下さい。



写真1 伝樺原市出土鐘（復元品）



写真2 伝樺原市出土鐘

(博物館学芸員)

開館5年を振り返って

田村 佳道



立正大学博物館は、平成14年4月に立正大学創立130周年記念として開設された。

初年度は、本学学生や博物館関係者の注目を集め多くの来館者があった。またこの年より夏季

休暇中の1週間、博物館実習を実施することにした。2年目からは見学希望者の要望が多い土曜日開館を行い、原則として年2回の企画展、特別展開催している。

第1回企画展「写真でみる日本古代木造塔の心礎—岩井隆次氏寄贈写真による—」は平成15年7月7日より1ヶ月間開催した。初めての試みで関係者はみな暗中模索の中準備に追われた。博物館専門職員であった上野恵司先生（平成17年11月23日逝去）を中心に史学科学生が大挙応援に駆けつけ昼夜を問わず奮励努力の結果、ポスターや看板は関係部署の協力を得て手作りで仕上げた。

第1回特別展「立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡」は平成15年10月16日より1ヶ月間開催した。合わせて記念講演会（①坂詰秀一氏（博物館長・前立正大学長）②柳田敏司氏（埼玉県文化財保護審議会会長））・パネルディスカッション（坂詰秀一氏・柳田敏司氏・渡辺一氏（鳩山町教育委員会））も開催した。

あわせて行った展示会では、来館者の皆様へ向けてバラバラになった土器の破片を用意した。これは、普段学生たちが実習などで勉強している土器の接合を実体験してもらおうと企画したもので、とても好評で幼児から大人まで無心に土器の破片の接合に取り組んでいた。作品の成功に歓声をあげ、粗品を手笑顔で帰られた。なんとも微笑ましく楽しい一時であった。

第2回企画展「南極、自然と人—南極観測の記録から—」は平成16年4月12日より1ヶ月間行った。また、記念講演会として「南極に魅せられて半世紀」と題して吉田榮夫氏（前立正大学長・国

立極地研究所名誉教授）にご講演を頂いた。

企画展の初日に、ニュージーランドのインバカーギルの高校生が見学に来た。英語の弱い私たちは突然のことで対応に苦慮しているときに、吉田榮夫先生が来館され、流暢な英語で細かに実体験を説明していただき、事無きを得てホッと胸をなでおろした。国立極地研究所や財団法人日本極地研究振興会より貴重な模型や写真等展示物をお借りした。先生から頂戴した南極の氷は、今でも博物館の冷凍庫に大切に保管されている。

第2回特別展「釈迦の故郷」は平成16年10月25日より1ヶ月間開催した。財団法人日本仏教会の協力を頂いたこともあり、開催前から電話等問い合わせが多く、中には「大変素晴らしい企画だ、もっとマスコミにPRすべき」などの有り難い電話を数回いただいた。我々関係者は大いに意気があがり準備に一層熱が入ったものである。同年12月には「立正大学仏教学部 卒業制作展—仏教美術の「存在」に遭う—」を特別企画展として実施した。

平成17年度の企画展・特別展は諸般の事情で中止となった。

第3回特別展「江戸狩野とその世界—作品と墓所—」を平成18年10月16日より1ヶ月間開催した。坂輪宣敬氏（仏教学部教授）・安藤昌就氏（池上本門寺霊宝殿学芸員）・本間岳人氏（池上本門寺霊宝殿・品川歴史館学芸員）による記念講演会も実施した。今年度は開館5周年目を迎えて、特別企画展として開催した。

この数回の催しでは、その準備に、第1回、第2回までは博物館専門職員で学芸員の上野先生を中心に史学科考古学関係の学生諸君達が準備作業に一丸となっていた姿は頼もしく、その団結力には敬意を表する。

年月の経つのは早いものでこの5年間はあっという間に過ぎ去った。毎年の入館者数も僅かずつではあるが増えている。

文学部学生の大崎校舎移転が終了して今後は相当厳しくなるが、立正大学熊谷校舎の目玉として皆さんに愛される博物館であることを切に願っている。

（博物館事務職員）

NEWS

来館者数

平成18年8月1日(火)～平成19年3月21日(水)

来館者数

8月119人、9月71人、10月567人、11月392人、
12月54人、1月13人、2月35人、3月106人
計1,357人

平成18年度総来館者数2,330人

来館者往来

〔高等学校〕

群馬県立館林商工高等学校・群馬県立桐生第一高等学校・群馬県藤岡中央高等学校・埼玉県東京成徳深谷高等学校・埼玉県桶川高等学校・埼玉県深谷高等学校・埼玉県川口青陵高等学校・埼玉県熊谷市立女子高等学校・長野県軽井沢高等学校

〔団体〕

彩の国いきがい大学熊谷学園・USM交換留学生・東松山市民生委・東松山滑川仏教会・東松山市妙昌寺・國學院大学

出版物

立正大学博物館では平成18年度に下記の刊行物を発行しました。

- ・『万吉だより』第5号(平成18年9月)
- ・『立正大学博物館年報』4(平成18年4月)

資料の貸出し

平成18年度は以下の資料の貸出を行いました。

- ・小田部鋳造株式会社
「撫石庵コレクション龍頭木型」1点
平成18年6月28日(水)～11月30日(木)
- ・品川区立品川歴史館
谷津池窯跡灰原出土男瓦1点
同 女瓦1点
谷津池窯跡関連写真カラスライド(35mm)7点
同 白黒スライド(6×6判)12点
平成18年9月17日(日)～12月16日(土)

博物館実習

平成18年度博物館実習を以下の日程で行いました。

・期間：

第1回平成18年7月31日(月)～8月5日(土)

第2回平成18年9月11日(月)～9月16日(土)

・場所：立正大学博物館

・実習生：22名

仏教学部仏教学科2名、文学部史学科12名、
文学部文学科4名、地球環境科学部環境シ
ステム学科3名、地球環境科学部地理学科1名

・内容：展示資料の資料台帳作り、写真撮影や
キャプション作りなどを行いました。その他に、
他の博物館の現状見学として、第1回目に財団法人
埼玉県埋蔵文化財調査事業団、第2回目に埼玉
県立さきたま史跡の博物館の見学に行きました。
また、自然史関係実習として島津弘氏(地球環境
科学部教授)に、また文化史関係の講義として第
1回目に柳田敏司氏、第2回目に市毛勲氏に依頼
して講義を行いました。



(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団見学風景



埼玉県立さきたま史跡の博物館見学風景

見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なご意見、ありがとうございます。今後の博物館運営に役立させていきたいと思っております。

- ・大学内で遺跡があることに驚きました。
(県内・本学学生・19歳男性)
- ・狩野派の絵画作品が間近でみれて良かった。お墓にも関連する道具があって興味深かったです。
(県内・本学学生・19歳女性)
- ・イルカなどの骨があり面白かった。縄文土器もいろいろあり勉強になりました。
(県外・大学生・18歳男性)
- ・なかなか良かったです。世界の釣鐘がありいろいろな形があることに驚きました。
(県外・大学生・19歳男性)

- ・もう少し説明があったほうが良かったです。展示は大変良かったと思います。
(県外・一般・34歳男性)
- ・キャンパス内の奥にあるのでわかりづらかったです。もっと案内を告知してほしいです。
(県内・大学生・26歳女性)
- ・新たに復元された梵鐘があり音色を聞かせて頂きました。大変いい音でした。
(県内・一般・40代女性)
- ・狩野派の特別展とても良かったです。有名な狩野探幽ぐらいいし知らなかったですが、今回の特別展で勉強になりました。
(県外・一般・50代男性)
- ・復元された梵鐘の音色がとても綺麗で良かったです。
(県外・一般・40代女性)

利用案内

所在地： 〒360-0161
埼玉県熊谷市万吉1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
開館日： 月・水・木・金・土曜日
(大学休業中を除く)
開館時間： 10:00~16:00
*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)
に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。
・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

あとがき

今年度で博物館も開館5周年を迎えました。まだまだ研鑽していかなければならないところがありますが、皆様に来て良かったと思われる博物館となるよう頑張っていきたいと思っております。また、開館と同時に事務職を担当されていた田村佳道さんが3月で退職されることになりました。5年間大変お世話になりました。お疲れ様でした。

(内田)

題字揮毫 田淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第6号
平成19(2007)年3月31日発行
編集・発行 立正大学博物館
〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
e-mail: museum@ris.ac.jp
http://www.ris.ac.jp/museum/index